

(練習スケジュールにあわせて掲載しているの、この先、曲順と一致しないことがあります)

### [NBA21a] (BWV33) レチタティーヴォ

イエスを鞭打った後、兵士たちは茨で冠を編んでそれをイエスの頭に載せます。ユダヤの王と自称する者ならば王冠も茨がふさわしいだろう、という意味です。また高貴な色とされる紫の服(Purpurkleid。高い音域で「高貴」を表している)をまとわせて、イエスをいたぶります。そして楽しげに「ユダヤ人の王、万歳！」(21b.)と囃し立てます。

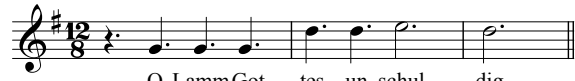
ここで扱われるモチーフは俗謡風です。幾分「きらきら星」の旋律にも似ており、また「マタイ受難曲」第1曲で登場するコラール旋律(少年合唱で歌われる)にも類似しています。おそらくバッハは素朴な旋律を使うことによって、そこに居合わせる人たちの無知と思慮の浅さを描きかけたのでしょう。



きらきら星



マタイ受難曲, 第1曲



### 【歌い方のポイント】

強拍(1, 4拍目)上のシラブル<grü->, <kö->を伸びやかに、他の拍は軽く歌います。また長く歌われる<lie->も、同様に伸びやかに歌います。

このことによって演奏に起伏が生まれ、声の疲労も避けられます。演奏に熱中するあまり声を張り上げることのないよう、注意すべきです。

ここでアクセントについて触れておきます。たとえば4拍子の場合、拍ごとの強さを「強 - 弱 - 中強 - 弱」となります。この第1, 3拍に言葉のアクセントが置かれるのは当然のことで、歌う際にもこれらの拍に重きをおきます。

音楽のアクセントが生まれるのは以下のようなときです。

①強拍におかれた音<grü-, lie-, kö->

②長い音価の音<2小節目第3拍の lie->

いっぽう、詩のアクセントは次のようになります。

①アクセントのあるシラブル (al-so)

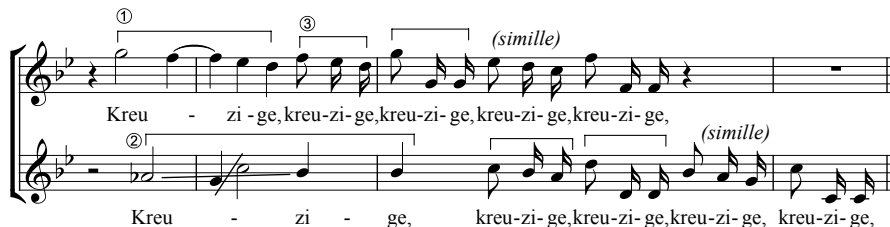
②長母音, 2重母音 (sch-et, kreu-zi-ge)

これらに留意して歌うと、起伏のある演奏になります。

### [NBA21d] (BWV35) 「十字架につける」

ピラトはイエスをどのように扱ったものか、戸惑いながらユダヤ人たちと自分の官邸の間を往復します。彼にはイエスを裁く理由がなかったの

です。たまりかねたピラトが「ではこの男をどうしたいのだ」と尋ねると、ユダヤ人たちは答えます。「十字架につける」。



ここには<kreuzige>という言葉に伴う、3つのモチーフが素材として使われています。ひとつは順次下降をなす①「破滅のモチーフ」(Sop.), 二つ目は②「十字架のモチーフ」(既出, Alt.)。2つの声部の開始は7度音程をなして、きしむような鋭い響きとなってこの場の緊張感を高めて

います。

そして3つ目が、せわしない③「叫びのモチーフ」です。モチーフ③の歌い方のコツは、<kreu->を強調し、<zi-ge>を控えめに歌うことです。どのモチーフも、群衆の高ぶった感情を的確に描写するようにします。